

日本の乳がんサバイバーによるピアサポートに関する 質的研究の文献レビュー

Literature review of qualitative research on peer support for breast cancer survivors in Japan

増永悦子¹
Etsuko Masunaga

要旨

わが国でピアサポートの体験をもつ乳がんサバイバーで、成人期以降の日本人女性を対象とした文献レビューを通して、ピアサポートに関する概念を整理し、研究知見を分析した。対象文献は8件で、第1著者は全て日本人研究者だった。対象文献でピアサポートの検討の為に引用している概念・理論は、「ソーシャルサポート研究に基づく概念・理論」「セルフヘルプグループ研究の知見に基づく概念・理論」「がんサバイバーの知見に基づく概念・理論」「心的外傷後の成長に関する諸概念」だった。そして、対象文献の研究参加者を、Susan Leigh によるがんサバイバーの「季節」で分類すると、「季節」のⅠ・Ⅱ・Ⅲの何れかであり、Ⅳの終末期に該当するものはなかった。さらに、対象文献のピアサポートに関する知見をメタ統合した結果、4つのテーマ、【意思決定支援過程における同病者の支援】【同病者の関りによる心的外傷からの回復】【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】【同病者による乳がんサバイバーへのソーシャルサポート】を得た。死や再発を意識しながらも、新たな目的をもち生きる乳がんサバイバーの成長には、同病者の語りや存在からの学びがあり、それが心的外傷からの回復や乳がん診断後の成長過程への要因と示唆される。

キーワード

乳がんサバイバー、ピアサポート、日本人成人女性、文献レビュー、質的研究

I 背景

わが国における女性のがん罹患は、乳がんが第1位であり、その療養期間は長期に亘る。乳がん成人女性達は、社会や家庭での役割に伴う課題に加え、がん告知の衝撃(千島, 2007, pp. 93-94)、複雑で多様な治療選択の意思決定(尾沼ら, 2004, pp. 45-57, 国府, 2010, p. 24)、治療に伴うボディイメージの変容や乳房の喪失体験(高井, 2012, pp. 41-51, 野島, 1982, pp. 32-40)等、乳がん体験による困難さに関連した多くの心理-社会的問題を抱えるとされる(鈴木, 2011, pp. 898-899, Sontag / 富山監訳, 2011, pp. 5-131)。

これらの問題に対してピアサポートが、心理・社会的適応や安寧(well-being)に重要な貢献をすると確認され(真壁, 野水, 2008, pp. 762-768, Hoey, et al, 2008, pp. 315-337)、QOLへの効果、さらに生存期間への影響の可能性も指摘されている(福井, 2005, pp. 33-43)。高橋(2003, pp. 357-600)は、がんサバイバーであるピアサポートの意義を、「当事者同士だから得られる深い共感と心理的効果」「自分だけが問題を抱えているのではないという孤独感の解消と心理的効果」「闘病上の様々な困難に対処する具体的・実践的情報の獲得」「自分のがん体験が他のがんサバイバーを支援することを知ること

¹ 一宮研伸大学 看護学部看護学科

による自尊心の回復」としている。

ピアサポートには様々な形態があり (Dennis, 2003, pp. 321-322)、我が国の乳がんピアサポートの多くは対面式でグループの形態をとる。代表的なものには、「あけぼの会」があり、それ以外にも多くのグループが活動を展開している(増永, 2009, p. 76)。海外では医療職とも協働し、ピアサポートの特性を活かし活動している。例えば、1952年米国で Terese Lasser が創立した「Reach to Recovery」は、医療者の求めに応じて、乳がんサバイバーによる乳がん患者への正式な病院訪問を行っている。そのピアサポーターとしての訓練プログラムは、米国がん協会(The American Cancer Society ; ACS)で提供されている (Rinehart, 1994, pp. 372-375)。このように乳がんサバイバーは自らの体験に基づいた支援を、同病者やその家族に展開している。

わが国では2007年施行の「がん対策基本法」(厚生労働省URLサイト.がん対策推進基本計画, 2012. 6)で、ピアサポートの促進が謳われ、医療者による乳がんサバイバーグループへの支援も開始されている。しかし、この取り組みは開始されたばかりで、わが国の乳がんサバイバーによるピアサポートに関連する概念も未整理である。そこで、乳がんサバイバーの療養生活の文脈でピアサポートの体験や意味を解明された質的研究を用いて、ピアサポートの関連諸概念を整理することは、わが国に固有な社会・文化的文脈に基づく乳がんサバイバーによるピアサポートの概念の解明に繋がると考える。さらに、そこに関わる医療者の課題も明確とはいえない。今後、乳がんサバイバーによるピアサポートへの医療者の関わりを発展させるには、乳がんサバイバーによるピアサポート研究の知見を分析し、その課題を十分に明確にする必要がある。

以上により本研究は、日本人成人女性の乳がんサバイバーによるピアサポートに関する質的研究を対象にして、わが国の乳がんサバイバーによるピアサポートに関する概念を整理し、研究知見を分析することで、乳がんサバイバーによるピアサポートを支援する医療者の課題を見出すことを目

的とする。

II 用語の定義

1. ピアサポート (Peer Support)

本研究は、Dennis (2003, p. 329) によるピアサポートの次の定義に依拠する。

「ヘルスケアの領域においてピアサポートとは、潜在的もしくは顕在的にストレスを受けた人が、健康に関連する問題に対処する為に、対象者と類似した特徴や対象者に固有の行動、あるいは、ストレス因子から得た体験的知識を所有する人で構成される、社会的ネットワークメンバーによって、情緒的サポート、評価的サポート、情動的サポートを提供されることである。」

ところで、ピアサポートはグループまたは個人が提供するとされて (Doull, 2005, p. 2)、そのグループの定義や名称は混乱して用いられているとの指摘がある (増永, 2009, pp. 75-76, Gray, et al. 1997, pp. 279-289, 大木, 谷本, 2010, pp. 1-12)。この点についても Dennis (2003, pp. 321-322) は専門職の関わりに着目し、専門職の関わりのあるのをサポートグループ (Support Group 以下 SG)、専門職の関わりがないか限定されているのをセルフヘルプグループ (Self Help Group 以下 SHG) とした。また、どちらにも1対1の支援があるとした。本研究のピアサポートの範囲も、Dennis (2003, pp. 321-322) のピアサポートの分類に依拠して「専門職の関わりがないか限定されている SHG による支援や1対1の支援」とする (図1参照)。

2. 乳がんサバイバー (Breast Cancer Survivor)

清水 (2010, pp. 95-99) は、The National Coalition for Cancer Survivorship (NCCS) によるサバイバーシップの定義として「サバイバーががんと診断されたときから人生の最後まで、がんを乗り越え、あるいは向き合いながら生きていくこと」を紹介している。本研究は、これらの定義に依拠して、乳がんサバイバーを次のように定義する。「診断された時から人生の最後まで、療養生活をする乳がん」と診断された人」

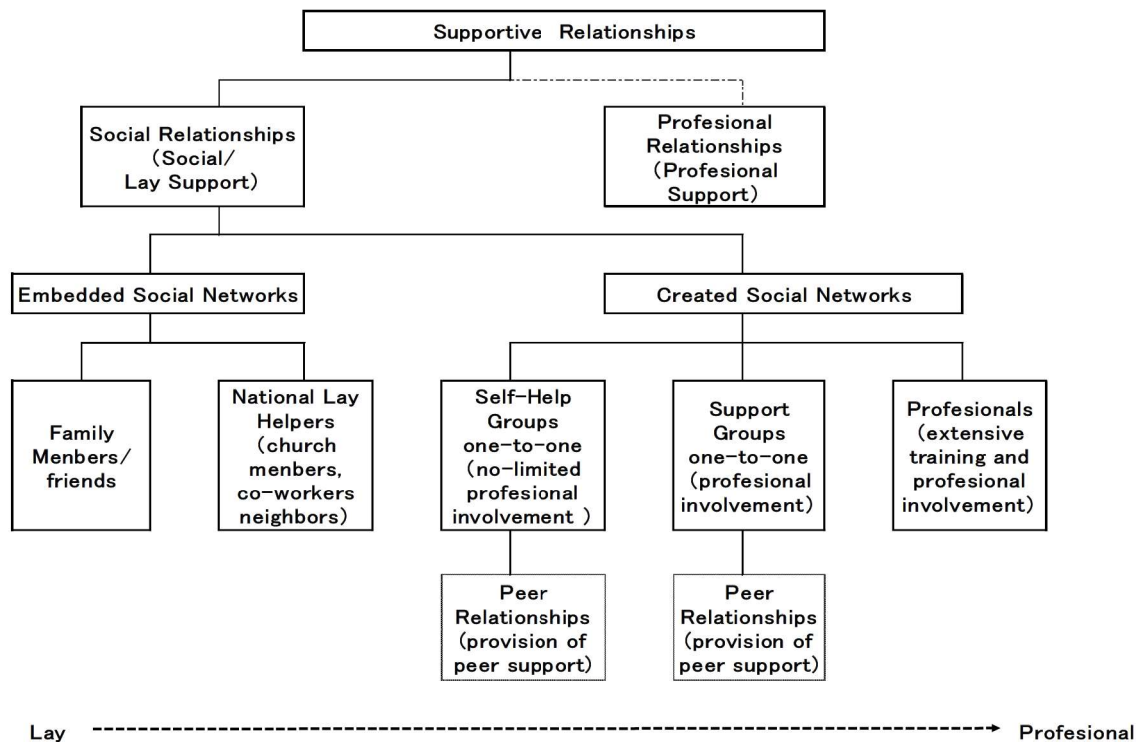


図1 Social relationships Classification. (Dennis C. (2003) P332, fig. 1 を抜粋)

III 研究方法

研究デザイン

本研究では、乳がんサバイバーを対象にしたピアサポートに関する質的研究の文献レビューを行った。国内・海外の文献データベースを用いて文献を収集した。国内の対象文献の選定には、医学中央雑誌 WEBVer.5 と CiNii-Articles WEB 版を用いた。海外の対象文献の選定には、EbscoHOST (CINAHL、ピアサポート PsycINFO、Medline) WEB 版を用いた。研究の同定の為に、検索用語は Cochrane Library でピアサポート研究の介入手順を提示した Doull (2005, p. 4) が選定した用語を参照して選定した。各々の文献データベースで用いた検索語を図 2 に示す。

対象文献は、わが国でピアサポートの体験をもつ乳がんサバイバーで、成人期以降の日本人女性を対象とした文献とした。検索期間は全年とし、2017 年 7 月迄に発刊された文献で入手可能な文献として、査読を受けた原著論文(ただし一部、重要と考えた研究報告等は含めた)を対象とした。海外文献は英語による文献を対象とした。文献の選定はジョアンナ・ブリッグス研究所 (Joanna Briggs

Institute 以下 JBI) の質的研究の評価項目を基に行った(大木, 彦, 2013, p. 84)。そして、対象文献の研究動向を詳細に把握する為に、論文の基本構成の各々を比較検討し、「ピアサポート」という言葉に着目して個々の文献を精読した(表 1 参照)。

さらに、対象文献の研究結果から「ピアサポートに関する知見」に該当する記述(質的データ)をそのまま抽出し、個々の論文毎に表に整理した。その上で、抽出した内容をメタ統合の手法で分析した。具体的には、データをコード化しカテゴリー化を進めて、対象文献間の差異と類似を検討し分析した。最後に、分析に時系列的な観点を導入する為に、メタ統合結果のピアサポートに関する知見を、がんサバイバーシップの「季節」(近藤, 嶺岸, 2006, pp. 2-12)の違いで比較検討した。

IV 結果

1. 文献の選定

対象文献の選定は、研究方法で述べた文献データベースを用いて全年で検索した。また図 2 に示す検索語を用いて検索した。検索結果から、国内文献は医学中央雑誌 WEBVer.5 では 339 件、CiNii-Articles WEB 版では 169 件の文献を得た。海外文

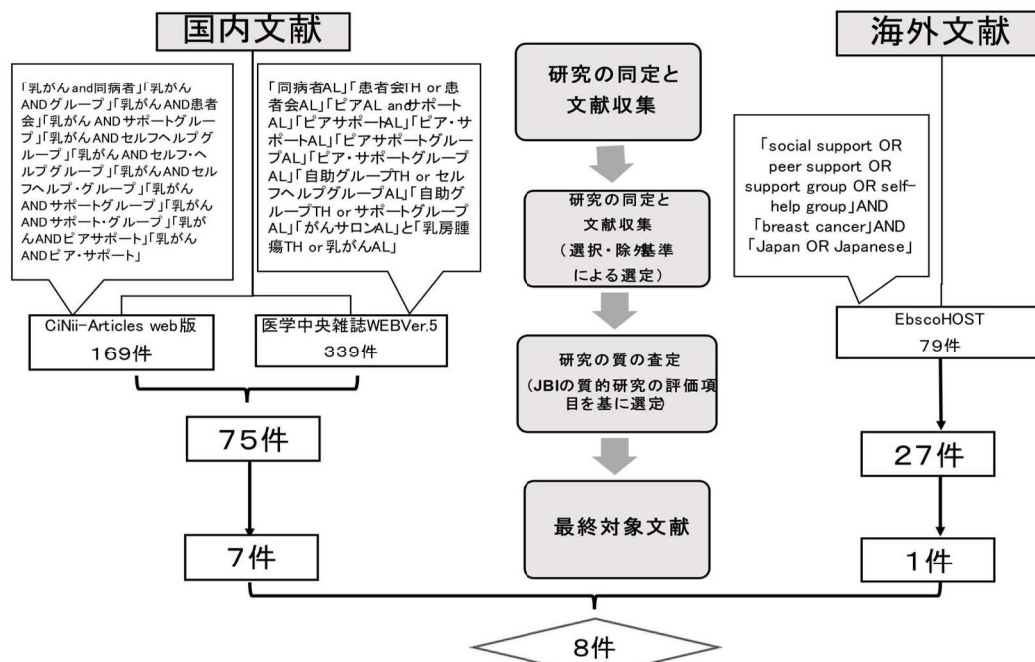


図2 文献選定の過程

献では EbscoHOST WEB 版で 79 件の文献を得た。国内文献の合計 508 件、海外文献 79 件の文献の中で、重複論文や海外論文では英語以外の論文、わが国でピアサポートの体験をもつ乳がんサバイバーで、成人期以降の日本人女性を対象とした文献に合致しない論文や、資料、総説、学会報告を除いた結果、国内文献 75 件、海外文献 27 件の文献を抽出した。さらに、JBI の質的研究の評価項目を基に、論文の基本構成の各々を比較検討し、「ピアサポート」という言葉に着目して個々の文献を精読した。その結果、最終的な対象文献として 8 件の文献を選定した (表 1)。対象文献の選定過程を図 2 に示す。

さらに、対象文献のピアサポートに関する内容を精読し、1. 対象文献の概要、2. 研究参加者のがんサバイバーの季節、3. ピアサポートを捉える概念的・理論的枠組み、4. ピアサポートに関する知見のメタ統合、以上の 4 つに着目して分析した。それらの結果を順に述べる。

2. 対象文献の概要

対象文献の第 1 著者は全て日本人研究者だった。その内、研究的認識論を述べた文献は 3 件で、現象学を用いた文献が 2 件 (それぞれブルーマーによるシンボリック相互作用論とワトソンの記述的

現象論)、経験的実証主義を用いた文献が 1 件だった。現象学を用いた 2 文献は、SHG での乳がんサバイバーの成長過程と、診断後 SHG リーダーとなり他者へのケアに至る過程を解明していた。経験的実証主義を用いた文献は、がんサバイバーの季節の回復期にある乳がんサバイバーが、がんとともに生きるプロセスを解明していた。対象文献 8 件の研究対象は、乳がんサバイバー (または乳がん患者) 4 件、SHG 参加者 3 件、SHG の回顧録 1 件だった。データ採取方法は、半構造化面接 5 件、半構造化面接と参加観察の併用 1 件、非構造化面接 1 件、文書のみ 1 件だった。

3. 研究参加者のがんサバイバーの季節

Susan Leigh が提唱したがんサバイバーの「季節」(近藤, 嶺岸, 2006, pp. 2-12)、すなわち、I. 急性期の生存の時期 (以下、季節I)、II. 延長された生存の期間 (以下、季節II)、III. 長期的安定した生存の時期 (以下、季節III)、IV. 終末期の生存の時期 (以下、季節IV)、以上の 4 季節に対象文献の研究参加者の病期を分類した。その結果、研究参加者の病期は、Susan Leigh によるがんサバイバーの「季節」で分類すると、「季節」の I・II・III の何れかであり、IV の終末期に該当するものはなかった。

表2 ピアサポートの検討に引用された概念・理論とその研究的背景

対象文献 番号	著者 (発刊年)	社会学	心理学	看護学	その他 * 欄外の註を参照
1	砂賀, 二渡 (2014)		④R: 米国心理学会 (2008)	④R: 砂賀 (2011)	
2	砂賀, 二渡 (2013)			③CSS: Leigh/近藤ら (2006)	③CSS: Clark & Stovall (1996)
3	Tsutiya, et al (2013)		④OVT: Jpseph & Linley (2008) PTG: Tedeschi & Colhoun(2004)		
4	国府 (2010)	①SS: Dacof & Taylor (1990)		①SS: 宮下 (2004) 真壁 (1999)	
5	妹尾 (2009)			①SS: 小迫 (2004)	
6	Ohga (2005)	②SHG: 久保・石川 (2001)			
7	八木 (2005)	②SHG: Katz (1993) Gartner (1977)	②SHG: Gray (1997)		
8	樋口, 塚原 (2000)	①SS: Cassel (1976) Cobb (1976)		①SS: 南 (1988)	

* 註: 第一著者のElizabeth J. Clarkは、アメリカの全国ソーシャルワーカー協会のCEOを務めたソーシャルワーカーである。

なお、共著者のEllen Stovallは、NCCSの会長を務めたがんサバイバーである。

◇ 表中の名前は引用された文献の著者名、括弧内の数字は発刊年を表す。

◇ 表中の概念的・理論的枠組の略語は以下の通り

① SS: social support ソーシャルサポート ② SHG: self-help group セルフヘルプグループ ③ CSS: cancer survivor-ship がんサバイバーシップ

④ PTG: posttraumatic growth 心的外傷後の成長

④ OVT: the organismic valuing theory 有機体価値づけ理論

R: resilience レジリエンス

4. ピアサポートの検討の為に引用された概念・理論とその研究的背景

対象文献がピアサポートの検討に引用した概念・理論は4つに分類され、それらを対象文献の発刊年順に並べると、①ソーシャルサポート (Social Support 以下 SS) 研究に基づく概念・理論、②SHG 研究の知見に基づく概念・理論、③がんサバイバーの知見に基づく概念・理論、④心的外傷後の成長 (Post Traumatic Growth 以下 PTG) に関する諸概念だった。この結果を表2に示す。

5. ピアサポートに関する知見のメタ統合

ピアサポートに関する対象文献の知見をメタ統合した結果、4つのテーマ、8つのカテゴリー、12のサブカテゴリーを得た。なお、以下の本文中の記号は【テーマ】[カテゴリー]「サブカテゴリー」を表し、データは「データ (斜字)」とし、直後に (対象文献番号) を表記する。4つのテーマは、【意思決定支援過程における同病者の支援】【同病者の関りによる心的外傷からの回復】【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】【乳がんサバイバーの同病者へのソーシャルサポート】で構成された。これらのカテゴリー化の過程を以下の表3に示す。

次に、対象文献の研究参加者の病期を「がんサバイバーの4季節」で分類した結果を含めて、テーマ毎に結果を述べる。

1) 【意思決定支援過程における同病者の支援】

このテーマは季節IIに分類できた。【意思決定支

援過程における同病者の支援】は、2つのカテゴリーと3つのサブカテゴリーで構成された。[意志決定への肯定的サポート]は「同病者による情動的サポート」「同病者による情緒的サポート」で構成されて、「選択肢に関する情報理解を促すサポート」「判断や考え方に関する具体的助言」「自己決定を後押しするサポート」「意思決定までの精神的サポート」(対象文献4)があった。[意志決定への否定的サポート]とは「同病者による否定的な情動的サポート」で構成されて、「混乱や孤独感を招くサポート」(対象文献4)があった。サポート(対象文献4)があった。

2) 【同病者の関りによる心的外傷からの回復】

このテーマは季節IIと季節II~IIIに分類できた。【同病者の関りによる心的外傷からの回復】は1つのカテゴリーと2つのサブカテゴリーで構成された。[同病者による肯定的変化]とは「同病者の勇気づけによる肯定的変化」で構成されて、同病者は「同じ体験をしたからこそ、わかり合えて励まし合える存在としての心の拠り所」であり、「安心して生活を送っていく為の支援が得られる」為には、「同病者とのかかわりの中で勇気づけられる」ことが必要であるとされた (対象文献1)。そして [同病者による肯定的変化]には「SHG参加による未来志向への変化」で構成されて、SHGで「信頼できる人間関係」を見出し、その乳がんサバイバーに「感謝」をもつことで「社会に進んで貢献し

表3 対象文献のデータのメタ統合

テーマ	カテゴリー	サブカテゴリー	データを得た文献
意思決定支援過程における 同病者の支援	同病者による意志決定への 肯定的サポート	同病者による情動的サポート	国府(2010) 国府(2010)
		同病者による情緒的サポート	国府(2010) 国府(2010)
	同病者による意志決定への 否定的サポート	同病者による否定的な情動的サポート	国府(2010) 国府(2010)
	同病者の関りによる 心的外傷からの回復	同病者による肯定的変化	同病者の勇気づけによる肯定的変化
SHG参加による未来志向への変化			Tsutiya(2013)
同病者による 乳がんサバイバーとしての成長	同病者の存在による成長	生きる力を支える同病者の存在	砂賀・二渡(2013)
		SHG参加による人間関係の再発見	Ohga(2005)
	乳がんSHG参加による成長	ロールモデルのSHG会長の影響	Ohga(2005)
		同病者支援による成長と自己実現	八木(2005)
同病者による 乳がんサバイバーへの ソーシャルサポート	同病者による情緒的サポート	同病者による対面での関り	樋口ら(2000)
		同病者の存在による励まし	妹尾(2009)
	同病者による情動的サポート	同病者同士の場での情報交換	樋口ら(2000) 樋口ら(2000)

たい」気持ちを持つとされた(対象文献3)。

3) 【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】

このテーマは季節IIと季節I~IIIに分類できた。

【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】は2つのカテゴリーと4つのサブカテゴリーで構成された。[同病者の存在による成長]は「生きる力を支える同病者の存在」で構成されて、「がん体験をわかりあえる同病者の存在」が「相互関係の中で支えられている実感」となり、それが「生きることを支える力になることだった(対象文献2)」。そして、[乳がんSHG参加による成長]とは3つのサブカテゴリーで構成された。「SHG参加による人間関係の再発見」とは「同じ疾患の経験」による「相互支援の機能」が「新しい人間関係の再発見」に繋がることだった。そして「ロールモデルのSHG会長の影響」とは「ロールモデル」であるSHG会長の影響を得たことである(対象文献6)。

さらに「同病者支援による成長と自己実現」とは、SHGリーダーら自身も会員への活動を通して、ケアの本質とされる「成長」と「自己実現」に至ったとされた(対象文献7)。また、そこでの「実感」から、同病者を「成長」や「自己実現」に導く着想を得たとされた(対象文献7)。

4) 【乳がんサバイバーへの同病者のソーシャルサポート (social support 以下SS)】

このテーマは季節Iと季節I~IIIに分類できた。

【乳がんサバイバーへの同病者のSS】は2つのカテゴリーと3つのサブカテゴリーで構成された。

[同病者による情緒的サポート]は2つのサブカ

テゴリーで構成された。「同病者による対面での関り」とは、「訪問・接触」「気分転換の誘い」「不安の傾聴」「相談」「励まし」「相談を受けることによる励まし」(対象文献8)だった。そして「同病者の存在による励まし」とは、他の乳がんサバイバーの体験談を聞くことや彼らとの出会いが励ましになると感じ、その結果「同病者の存在に勇気づけられる」ことで「乳がんに罹患した人の存在が励ましになる」ことが示された(対象文献5)。「同病者による情動的サポート」は1つのサブカテゴリー「同病者同士の場での情報交換」で構成されて、それは「お互いの状態を話し合った」「体験談からのアドバイス」(対象文献8)だった。その情報交換の方法としては、電話での話し合いや、時には一緒に旅行し「情報交換の場」を設けたとされた(対象文献8)。

V 考察

1. ピアサポートに関する質的研究の動向

本研究の対象文献の研究参加者は、SHG参加の乳がんサバイバー(または乳がん患者)が2件で、それ以外の乳がんサバイバー(または乳がん患者)が6件だった。ピアサポートはグループまたは個人が提供する(Doull, 2005, p. 2)とされる。ピアサポートを公式に展開するSHG参加者に限定せず、乳がんサバイバーが非公式に展開するピアサポートを解明するには、乳がんサバイバーの個々の語りを探索的に分析する質的研究を用いることが妥当と考えられる。

また、対象文献のデータ採取方法は、7件が面接（半構造化6件、非構造化1件）、患者会の回顧録の文書分析1件であり、面接が主要なデータ採取方法であることがわかる。対象文献のうち認識論を踏まえて研究方法論を述べていたのは、現象学を用いた2件と経験的実証主義を用いた1件だった。それらの研究課題は、SHGでの乳がんサバイバーの成長過程、SHGリーダーとして他者ケアに至る過程、乳がんサバイバーが乳がんと共に生きる過程の解明だった。これらは、同病者による乳がんサバイバーとしての成長におけるピアサポートの経験の意味を深く探究するもので、質的研究の特性を生かした研究だった。

2. ピアサポートの検討の為に引用された概念・理論とその研究的背景の変遷

ピアサポートの検討の為に対象文献で引用された概念・理論とその研究的背景の変遷を概観すると、まず2000年代には、乳がんサバイバーをその一部とする広範なSHG研究の知見に依拠して、乳がんサバイバーの患者会での支援体系を概念化していた。そして、同時期に、重要他者からの支援を体系化したSS研究の知見や、がんサバイバーシップの概念に依拠した研究もなされた。近年はPTGに関する知見に基づき、がん告知を心的外傷体験と捉え、その後のがん体験を肯定的に変化させる要因を探究する研究が行われている。すなわち対象文献でのピアサポートは、患者会等のSHG内に限定した支援とピアサポートを捉えることから、個々がもつソーシャル・サポート・ネットワークの一員の同病者の支援としてピアサポートを捉えて、その概念を変化させたと考える。

また、対象文献の研究参加者の表現は「患者」から「がんサバイバー」へと年代を経ると変化しているが、これは単なる呼称変更ではなく、新たな意味が付与されたものと考えられる。「がんサバイバーシップ」とは、犠牲者としてのがん患者という見方から脱却し「いかにその人らしく生き抜いたか」を重視する概念とされる（桜井, 2012, pp. 445-448）。がんサバイバーは一方的に支援を受ける弱者ではなく、医療者らによる権利擁護の支援

を得て主体として生活する人とされ（清水, 2010, pp. 95-99）、その力をもつ人による相互支援へと、ピアサポートの概念も変容していると示唆される。そして「がんの衝撃の体験」とは、これまでの世界観を瓦解させる心的外傷体験とされる（安藤, 2009, pp. 35-37）。近年のPTG研究では、その衝撃体験から生活を再構築するには、同じ体験を有しながらも新たな世界観を獲得し、生活を再構築した同病者による支援の有効性が提示され（安藤, 2009, pp. 37-42）、そのことを本研究でも確認できた。

3. がんサバイバーシップの4季節でのピアサポートの特徴

ピアサポートに関する対象文献の知見をメタ統合した結果、4つのテーマ、すなわち【意思決定支援過程における同病者の支援】【同病者の関りによる心的外傷からの回復】【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】【同病者による乳がんサバイバーへのSS】を得た。ここでは、がんサバイバーシップの季節との関連で、ピアサポートに関する特徴的なカテゴリーを検討する。

季節Iでは【意思決定支援過程における同病者の支援】と【同病者による乳がんサバイバーへのSS】が示された。乳がん治療は病理結果に基づく手術療法・がん化学療法・放射線療法・内分泌療法等の治療に加え、再建手術を実施する場合もあり（鈴木, 2011, pp. 898-90）、その治療は多様で複雑で一般化が困難である。中山（2011, pp. 220-224）はHaynesらの臨床上の意思決定の関連要因を基に、その要因の一つに患者自身のナラティブ情報を位置づけ、「一般論としての臨床的エビデンスと共に、医療者の専門性・経験そして患者の価値観が同様に尊重される」と述べている。治療選択の意思決定を迫られる季節Iに、医療者の支援とは異なるナラティブや実体験に基づく当事者の支援、【同病者による乳がんサバイバーへのSS】が提供されることは、ピアサポートの大きな意義と考える。

そして、季節IIと季節I~IIIのテーマで【同病者による乳がんサバイバーとしての成長】、季節IIと季節II~IIIに【同病者の関りによる心的外傷からの回復】が示された。すなわち、乳がん診断の衝撃は、

死への直面や心的外傷にも繋がる。しかし、そのことは新たな人生の目的の獲得にもなり、それは文化をこえた人類的経験の普遍性を学ぶ機会とされる (Merriam SB. / 立田ら, 2010, 52)。死や再発を意識しながらも、新たな目的をもち生きる乳がんサバイバーの成長には、同病者の語りや存在からの学びがあり、それが心的外傷からの回復や乳がん診断後の成長過程への要因と示唆される。

4. ピアサポートがもつ援助特性の課題

既存のピアサポートは主に SS の機能的側面で分類・評価されてきた (Dennis, 2003, p. 235)。情報提供等の支援の際でも情緒的配慮がなければ、がん患者はそれを有益と評価しないとされ (Dunkel-Schetter, 1984, pp. 77-98)、情緒的サポートの提供の意義が指摘されている (Blanchard, et al. 1995, pp. 75-95)。本研究では【同病者による乳がんサバイバーへの SS】において、SS の機能的側面である情緒的・情動的サポートの 2 側面から分類できた。ただし本研究では、そのサポートの存在は確認されたが、それらの相互関係の解明までに至らず、その解明の為の実証研究の実施が今後の課題と考える。そして対象文献の知見で【意思決定支援過程における同病者の支援】は、肯定的・否定的影響で構成されていた。久田 (1987, p. 173) は Cobb.S の知見を引用し、「サポートは客観的な実態というより受け手の認知または体験」と SS を情報と捉える考えを紹介している。対象に望ましく何らかのニーズを満たす支援に繋がる介入が必要と考える。

5. わが国の乳がんサバイバー同士による支援への課題

わが国のピアサポートを捉える概念は、近年、がんサバイバーシップの概念に影響を受けていた。看護師はがんサバイバーシップの概念を尊重し、乳がんサバイバーが力を発揮し主体的に活動できるように、権利擁護を含めた関わりが重要と考える。それには既存のピアサポート研究で用いられた諸理論・概念での、肯定的特性の促進も必要と考える。また、対象文献の研究参加者の病期をサバイバーシップの 4 季節で分類した結果、季節IVの該当文献は確認できなかった。今後、再発や進

行がんの期間や終末期での、ピアサポートの概念の規模や範囲の拡大可能性の検討の為に、まず、その期間のピアサポートの実態の解明が必要と考える。

最後に既に久田 (1987, p. 178) は SS 提供時の問題として、当事者だけでなく家族も苦悩を抱える存在で、家族を含めたシステム全体へのサポートの提供の必要性を指摘している。それには、がん医療で相互に影響する乳がんサバイバーと家族を理解し (柳原, 2008, pp. 342-343)、家族システムと医療システムとの影響も理解して (柳原, 2008, p. 346)、乳がんサバイバーによるピアサポートでの医療者のあり方の解明が、今後、一層必要と考える。

VI. 研究の限界と課題

本研究は選定条件に合致した少数の文献を対象とした為、研究知見に限界があると考え。今後は本研究で解明された課題達成の為に、乳がんサバイバーによるピアサポートの実証的研究の展開の必要があると考える。

付記

本研究は、2018 年度名古屋大学大学院教育発達科学研究科の博士論文の一部を、加筆・修正したものである。

謝辞

本研究で指導を受けた名古屋大学大学院教育発達科学研究科 (当時) 大谷尚教授に、紙上をもって深く謝意を示すものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

安藤清志 (2009), 否定的事象の経験と愛他性. 東洋大学社会学部紀要, 47(2), 35-44.

CG. Blanchard, TL. Albrecht, JC. Ruckdeschel, et al (1995). The role of social support in adaptation to cancer and to survival. *Journal of Psychosocial Oncology*. 13, 75-95.

- Dennis C (2003). Peer support within a health care context: a concept analysis. *International Journal of Nursing Studies*, 40, 321-332.
- C. Dunkel-Schetter (1984). Social Support and Cancer; Findings Based on Patient Interviews and Their Implications. *Journal of Social Issues*, 40(4), 77-98.
- M. Doull, AM. O'Connor, V. Welch, et al (2005). Peer support strategies for improving the health and wellbeing of individuals with chronic diseases. *Cochrane Database of Systematic Reviews*, Issue 3.
- 福井里美 (2005). 中年期がん患者のソーシャル・サポート・ネットワークー手術前後のサポーターの内容と変化. *日本看護科学会誌*, 22(1), 33-43.
- Gray R, Fitch M, Davis C, et al (1997). A Qualitative Study of Breast Cancer Self-help Group. *Psycho-Oncology*, 6, 279-289.
- 久田満 (1987). ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題. *看護研究*, 20(2), 2-11.
- LM. Hoey, SC. Ieropoli, VM. White, et al (2008). Systematic review of peer-support programs for people with cancer. *Patient Education and Counseling*, 70(3), 315-337.
- 厚生労働省. がん対策推進基本計画 (2012. 6) http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikuaku02.pdf (2017. 7 閲覧)
- 国府弘子 (2010). 初期治療選択を行う乳がん患者が受けるサポート. *日本がん看護学会誌*, 24(2), 24-31.
- 近藤まゆみ, 嶺岸秀子編 (2006). がんサバイバーシップ. 東京, 医歯薬出版, 2-12.
- 真壁玲子, 野水整 (2008). 乳がん体験者のソーシャル・サポートと精神的・身体的状況-手術後2年までの縦断的研究. *がん看護*, 13(7), 762-768.
- 増永悦子 (2009). 日本におけるがん患者を対象としたセルフヘルプグループに関する文献研究. *愛知医科大学看護学部紀要*, 8号, 75-83.
- SB. Merriam (2010) / 立口慶裕, 岩崎久美子, 金藤ふゆ子, 他訳 (2010). 成人学習理論の新しい動向. 福村出版, 東京, 52.
- 中山健夫 (2011). 闘病記とエビデンス. *薬学図書館*, 56(3), 220-224.
- 野島良子 (1982). 乳癌患者における心理的反応の推移. *日本看護研究学会雑誌*. 5(2), 32-40.
- 大木秀一, 彦聖美 (2013). 研究方法論としての文献レビュー: 英米の書籍による検討. *石川看護雑誌*, 10, 84.
- 大木秀一, 谷本千恵 (2010). コミュニティにおけるセルフヘルプグループを基盤としたサポートネットワークシステム研究の今日的課題と展望. *石川看護雑誌*, 7, 1-12.
- 尾沼奈緒美, 鎌倉やよい, 長谷川美鶴, 他 (2004). 手術を受ける乳癌患者の治療に関する意思決定の構造. *日本看護研究学会雑誌*, 27(2), 45-57.
- Rinehart ME (1994). The Reach to Recovery Program. *Cancer*, 74, 372-375.
- 桜井なおみ (2012). がんサバイバーからの発信 がんサバイバーシップ活動を通して. *がん看護*, 17(4), 445-448.
- 清水研 (2010). サバイバーとサバイバーシップ. *腫瘍内科*, 5(2), 95-99.
- S. Sontag (1982) / 富山太佳夫 (監訳) (2006). 隠喩としての病い・エイズとその隠喩. 東京, みすず書房, 5-131.
- 鈴木久美 (2011). 乳がんと診断された女性を支える看護. *助産雑誌*, 65(10), 898-901.
- 高橋都 (2003). がん患者とセルフヘルプグループ. *ターミナルケア*, 13(5), 357-360.
- 高井俊子 (2012). 術後10年までの乳がん患者の乳房再建-セクシュアリティとソーシャル・サポートに関する研究. *奈良県立医科大学医学部看護学科紀要*. 41-51.
- 千島隆司 (2007). 乳がん患者と家族のメンタルケア. *予防医学*, 49, 93-94.
- 柳原清子 (2008). 家族理論にもとづいた家族アセスメントの方法とそのポイント. *緩和医療学*, 10(4), 341-346.